幻の国際鉄橋

China
［中国］

写真・文＝小竹 直人（写真家）

遼寧（りょうねい）省の寛甸（かんてん）満族自治県。レールはさび付いて雑草や雪に埋もれているが、北朝鮮に通じる鉄橋までつながっている

c

d

c. 朝鮮戦争で破壊された鴨緑江第1橋梁。北朝鮮側は橋脚部分だけが残る
d. 上河口鴨緑江橋は全長673.4メートル。中国管轄部分にトラスが架けられている

a

b

a. 日本統治時代の鴨緑江第2橋梁は1990年に中朝友誼橋と改名された
b. 集落の片隅に放置されたままのコンクリート橋梁。満鉄の野望はここで途切れた

遼寧省丹東市は、北朝鮮との国境の町として知られる。中朝の国境を成す鴨緑江のほとりに2本の鉄橋が朝鮮半島に向かって伸びている。いずれもかつて日本が建設したもので、上流側に位置する中朝友誼橋は1943年に建設された、道路と鉄道の併用橋であり、今なお中朝貿易の大動脈として使われている。

もう1本の鴨緑江第一橋梁は1911年に建設された鉄橋で、朝鮮半島と満州を初めて結んだ国際鉄橋となった。1950年に勃発した朝鮮戦争で、アメリカ軍の空爆によって破壊されたままの「断橋」として、その姿を今に残す。

丹東から国境沿いに車を走らせることおよそ60キロ。滔々と流れる大河のほとりに1本の鉄橋が佇んでいた。辺りは人家も少なく、通る車もあまりない。対岸は北朝鮮の清水という小さな町で、中国側と同様にひっそりと静まり返っていた。いくつかの工場の煙突が見える。それらはかつての日本統治時代のもので、廃墟と化していた。

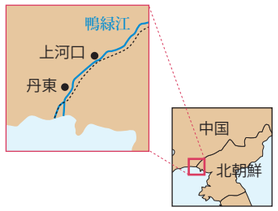
この上河口鴨緑江橋は1940年に当時世界最大級を誇った水豊ダムの建設に伴って架けられた鉄道橋だ。朝鮮定州から清水、国境を渡り満鉄と接続する路線でもあった。実際は満州の上河口止まりで列車が運行され、ダムが完成した1944年になるといったん列車の運行が中止となった。第二次世界大戦の戦況悪化で、満鉄側の接続線の工事が頓挫していたからだった。道床やトンネルは完成していたが、全てのレールを敷設するまでには至らず、その後に終戦を迎えたことで、幻の国際ルートとなってしまった。

e

g

f

e. 高さのある窓が印象的な駅舎は、ロシア人が設計した
f. 庭の片隅に鉄路局のマークが篆刻（てんこく）された石票が今も置かれていた
g. 老夫婦が暮らす、かつての駅舎の壁には文革時代に書かれたスローガンが今も残されている



ところが、新中国が建国されてまもなく、朝鮮戦争が勃発したことで、未完の国際鉄道は急きょ兵站（へいたん）鉄道として再建され、1950年11月に開通した。それは、丹東の鉄橋が空爆された直後の事でもあった。丹東を表ルートとすれば、上河口は裏ルート的なものだった。兵員物資輸送に活用された鉄橋も1953年の休戦によってその役目を終えた。1956年頃まで列車の往来があったが、以降60年間この橋を渡った列車は1本たりともない。

鉄橋に向かうさびたレールの傍らに、一軒の古い民家があった。小さな庭では家畜の鶏が駆け回り、軒先にはランプシェードを設えたその家は、駅舎を思わせる佇まい。そこには、ともに193 1年生まれの老夫婦が暮らしていた。

驚くべきことに、主人の楊（よう）さんは、兵站鉄道として再開された1950年当時の駅員であった。それから40年近くも汽車の来ることのない駅で駅員として働き続けたと語ってくれた。楊さんの自宅は2003年に発電所の建設で立ち退きを余儀なくされ、かつての職場であったこの駅舎に移住したという。

なぜ、列車の来ない駅に駅員が必要なのか――。朝鮮半島に続く放置されたさびたレールや鉄橋は、今なお〝戦備〟であるからだ。鉄橋は24時間体制で人民解放軍の監視下にあり、鉄の門扉で固く閉ざされている。

この門扉がいつ開かれるか分からないが、それが有事でないことを願うと同時に、いつか列車に乗ってこの橋を渡ってみたいと思わずにはいられない。鉄道好きの儚（はかな）すぎる希望かもしれないが。

h

i

h. 楊さんは脳梗塞を患い言葉が少し不自由になってしまったが、妻の菊さんが代わりに答えてくれた
i. 上河口に通じるこの短いトンネルは、1956年以降、国際鉄橋と同様に休眠状態となった

［写真展案内］

「国境鉄路」
～日本が中朝国境に遺した7本の鉄道橋～

●**オリンパスギャラリー東京**
2017年1月30日（月）～2月8日（水）、11～19時（最終日は15時まで）。
2月2日（木）休館。入場無料。

●**オリンパスギャラリー大阪**
2017年2月17日（金）～23日（木）、10～18時（最終日は15時まで）。
日曜・祝日休館。入場無料。

小竹 直人（こたけ なおと）

1969年新潟市生まれ。フォトジャーナリスト樋口健二氏に師事。1990年より中国取材を始める。中国関連書籍を多数執筆。主な著書に『中国蒸気機関車の旅』（筑摩書房）や『中朝鉄路写真紀行』（マガジンハウス）など。